

「ゆゑ・よし」考

二十九回生 緒方弘子

目次

序 本論

第一章 「ゆゑ」と「よし」の概観

(1) 使用例数

(2) 語形

第二章 用法の考察と比較（大意のみ）

(1) 事物に見られる「ゆゑ」「よし」

(2) 人間関係に見られる「ゆゑ」「よし」

(3) 「由緒」という面から見た「ゆゑ」と「よし」の性格（略）

第三章 身分による「ゆゑ」「よし」の使い分け

結び

序

上古から現代まで幅広く用例のみられる名詞「ゆゑ」「よし」は、それぞれ多様な意味・用法を持つが、その中で、平安朝文学において「由緒ある趣」などと訳されて、趣の

世界を意味する用法は、「ゆゑ」「よし」に共通して見られるものである。この用法の「ゆゑ」「よし」は、平安朝の美意識と関係する諸語とよく並立使用されており、その意味・用法の把握は、中古の文学のより深い理解のために必要であると思われる。

また、この用法の「ゆゑ」「よし」は、同義であるとするのが通説であり、注釈書などでもそのように訳されているが、はたして完全な同義語であるだろうか。本稿では、事物と人間関係の二つの面から「ゆゑ」「よし」の見られる対象を考察して「ゆゑ」「よし」の用法を分析し、その意味や性格について考え、さらに両者の違いを明らかにしてみた。

第一章 「ゆゑ」と「よし」の概観

名詞「ゆゑ（故）」には大別すると、(1)原因・理由、(1)理由を示す形式名詞、(2)逆接を示す形式名詞、(2)さしきわり、(3)縁故、(4)由緒ある趣、の用法があり、名詞「よし

第二章 用法の考察と比較

(由)には、①原因・理由、①事の趣旨を示す形式名詞、②手段・方法、②口実・機会、③よりどころ、④由緒ある趣、⑤見せかけ、などの用法がある。本稿で考察の対象とするのは、「ゆゑ」の④、「よし」の④の、「おもむき」の世界に使われる用法であり、調査した20作品の「ゆゑ」「よし」計99の用例中、この用法の「ゆゑ」「よし」は12作品に見られ、計206の用例がある。

表1は、用法④と④の使用例の数を、時代をおって作品別に記したものである。「趣」などを意味する「ゆゑ」「よし」はどちらも平安中期、『落窪物語』あたりからその用例が見られ始め、平安時代に最も多く使われたことが表1やグラフ2などからわかる。

「ゆゑ」「よし」は名詞であるが、単独で使われるのは「ゆゑ」が10例、「よし」が3例であり、ほとんどが形容詞・動詞・名詞の派生語である。大別すると、

- ①あり・づく・び、が下接した語形
ゆゑあり・よしあり・ゆゑづく・よしづく・ゆゑぶ
- ②めく・ばむ・だつ が下接した語形
よしめく・よしばむ・ゆゑばむ・ゆゑだつ
- ③ゆゑなからず・よしなからず
- ④ゆゑゆゑし・よしよしし
- ⑤その他
ゆゑ深し・よし深し・よし過ぐ
などに分けられる。

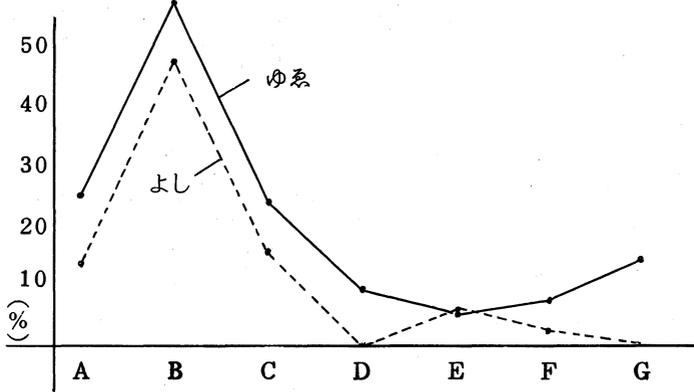
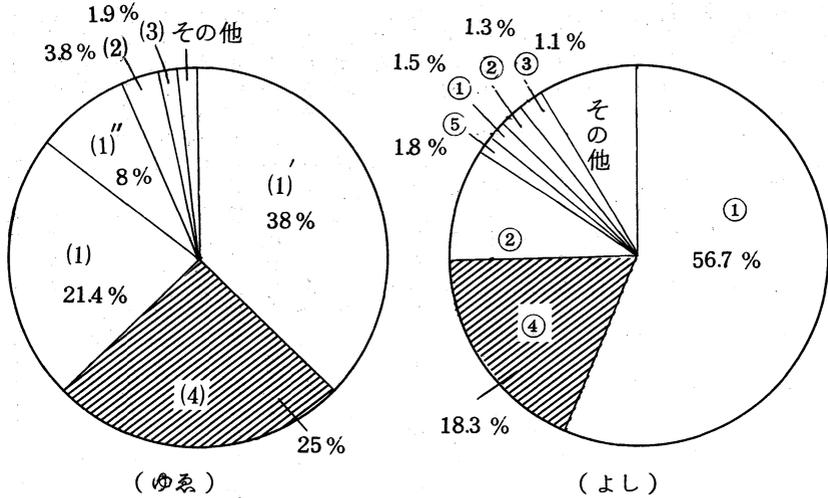
「ゆゑ」系の語と「よし」系の語を、人間関係に使われるか事物関係に使われるかに大別して、使用例数を調べたのが表4であり、それらの内訳をもう少し詳しく記したものが表5と表12である。

「ゆゑ」系の語と「よし」系の語の違いを調べるために、さらにその細かい項目別の「ゆゑ」と「よし」の使われ方を比較してみると、いくつかの事が明らかになってくる。

事物関係に使われる「ゆゑ」「よし」は、新しい物よりは古い由緒のある物に多く見出される、しみじみとした情感のある趣である。それもことさらに洒落た風情というよりは、さりげなく無意識的であらわれる趣をいう。対象物による使い分けはあまりないが、やはり「ゆゑ」と「よし」には若干の性格の違いが見られる。ひとつは趣の度合いについてで、宮中の催しや儀式の調度類などに「ゆゑ」系の語だけが使われ、「よし」系の語は日常的な道具類に使われることや、同じ対象物(建物)に対する「よし」から「ゆゑ」への変化などから、「ゆゑ」は「よし」よりも重々しい、あるいは深い趣を意味することがわかった。また、もうひとつ趣の質というものについて、「言葉」についての用例から、「ゆゑ」は表面的な趣ではなく、本質的な趣を意味することがわかる。

一方、人間関係に見られる「ゆゑ」「よし」も事物関係に使われる「ゆゑ」「よし」と同様に、一言で言えば「由

(グラフ1) 全使用例に対する「趣」の意の「ゆゑ」「よし」の割合



(グラフ2) 通時的にみた使用度

※ グラフ2のパーセンテージは

$$\frac{\text{「ゆゑ」用法(4)の使用例数}}{\text{「ゆゑ」の全使用例法}} \times 100$$

$$\frac{\text{「よし」用法④の使用例数}}{\text{「よし」の全使用例数}} \times 100$$

※ A B C D E F Gは表1の時代の近い作品グループをさす

(表1) 全使用例に対する「趣」の意味の「ゆゑ」「よし」の数

作品名	年代	よし	よし④	ゆゑ	ゆゑ(4)	区分	よし④	ゆゑ(4)
万葉集	720 ~900	56		85				
竹取物語	800 ~	8		2				
古今集	905 ~	10		3				
伊勢物語	905 ~935	6		2				
土佐日記	935	1		0				
落窪物語	950 ~1000	15	2	4	1	A	2 (13.3)	1 (25.0)
枕草子	995 ~1001	10		4	1			
源氏物語	1002 頃~	186	89	127	67	B	97 (46.4)	76 (53.5)
紫式部日記	1002 頃~	10	8	10	9			
和泉式部日記	”	3		1				
更級日記	1060	11	1	4		C		
堤中納言物語	11C 後半	9		6	5		8 (14.0)	7 (21.9)
とりかへばや 物語	平安 後期	37	7	22	2			
方丈記	1212	1		5		D	0	2
宇治拾遺物語	1216 ~1221	92		20	2		(0)	(8.0)
平家物語	鎌倉 初期	81	4	20	1	E	4	1
十六夜日記	1279 頃	3		3			(4.7)	(4.3)
徒然草	1330 ~1331	22		37	1	F	2	4
増鏡	1333 ~1376	53	2	11	3		(2.7)	(8.3)
雨月物語	1768	2		7	1	G	0 (0)	1 (14.3)
計		616	112	373	93		112 (18.2)	93 (25)

(表2) 作品別・語形別 使用例数

	ゆゑあり	ゆゑなし	ゆゑゆゑし	ゆゑ深し	ゆゑづく(四)	ゆゑづく(下三)	ゆゑだつ	ゆゑばむ	ゆゑぶ	ゆゑ(名)	ゆゑゆゑし(名)	よしあり	よしなし	よしよしし	よし深し	よしづく	よしばむ	よしめく	よし過ぎ	よし(名)	よしばみ(名)	計
落枕	1						1					2										3
源	28	8	1	2	2		1		7	2	51	5	7		10	5	8	1	1	1	1	156
紫	2		4						3				1	1		1	1	2		2		17
更															1							1
堤	1		2	1		1																5
と	1			1								4	1					2				9
字	2																					2
平								1				4										5
徒					1																	1
増	2				1							1	1									5
雨	1																					1
計	38	8	17	3	9	2	2	1	1	10	2	62	6	10	1	11	6	12	1	3		206

(表3) 活用別 使用例数

	ゆゑあり	ゆゑづく	ゆゑづく	ゆゑゆゑし	ゆゑ深し	ゆゑなし	ゆゑばむ	ゆゑぶ	よしあり	よしづく	よしよしし	よし深し	よしなし	よしばむ	よしめく	よし過ぎ	ゆゑ	よし	ゆゑだつ	よしばみ	ゆゑゆゑし	計
	形・ク	自四	他下二	形シク	形ク	形ク	自四	自上一	形ク	自四	形シク	形ク	形ク	自四	自四	自上一	名	名	自四	名	名	
未然	1					7			1					6								15
連用	11	9	2		2			1	14	11		1		3	7	1						83
終止									5													5
連体	25			7	1	1			42					1	3							81
已然	1																					1
命令							1							2	2							5
																	10	3		1	2	16
計	38	9	2	17	3	8	1	1	62	11	10	1	6	6	12	1	10	3	2	1	2	206

(表12)
人間関係の「ゆゑ」「よし」

	対 象	ゆゑ系	よし系	計
人・人柄	男	3	9	65
	女	10	23	
	その他	10	10	
趣味	こ と	1	2	11
	方	3	2	
	ところ	0	1	
	その他	2	0	
心	心	1	0	7
	心おきて	1	0	
	ありさま	0	1	
	心ばせ	1	2	
	用意	0	1	
容姿・容貌	容 姿	3	13	22
	容 貌	0	3	
	声	0	3	
態 度	暮らしぶり	3	1	24
	ものごし	1	2	
	ものいい	4	3	
	ふるまい	2	6	
	その他	1	1	
その他	下二段のゆゑづく	2	0	
計		48	83	131

(表5)
「ゆゑ」「よし」にみられる「物」

	対 象 物	ゆゑ系	よし系	計
自然	自 然	2	0	14
	庭園の自然	5	7	
建物類	垣・籬	1	1	11
	廊	2	0	
	邸	3	2	
	寺・僧庵	2	0	
調度類	道具・調度	7	3	13
	贈物	1	1	
	網代車	0	1	
衣類	装束全体	3	1	6
	装束の一部	0	2	
手紙類	歌	2	0	20
	消息(文)	3	0	
	紙	1	0	
	筆跡	6	8	
書物類	漢詩集	1	0	3
	歌 集	1	0	
	物 語	1	0	
催事	宮中の催事	1	0	2
	六条院の催事	1	0	
飲食物	くだもの	0	3	4
	肴	1	0	
その他	言 葉	1	0	5
	所	0	1	
	規 則	0	1	
	形式名詞「事」	0	2	
計		47	31	78

(表4)
「ゆゑ」「よし」の対象

	対 象	ゆゑ系	よし系	計
事 物	自 然	7	7	14
	建物類	8	3	11
	調度類	8	5	13
	衣 類	3	3	6
	手紙類	12	8	20
	書物類	3	0	3
	催 事	2	0	2
	飲食物	1	3	4
	言 葉	1	0	1
	その他	2	2	4
	小計	計	47	31
人 間	人・人柄	23	42	65
	趣 味	6	5	11
	心	3	4	7
	容貌・容姿	3	19	22
	態 度	11	13	24
その他	2	0	2	
小計	計	48	83	131
小計	計	95	114	209

(注) 計が206例を上まわるのはのべ使用数を出したため

緒ある趣」を意味する。気品と教養の感じられる情趣をい
うのである。ただし、「ゆゑ」は人間を全体的・客観的に
とらえた時に使われ、「よし」はより部分的・具体的にと
らえた場合によく使われる傾向を持つ。容姿・容貌といっ
た表面的な趣にはほとんど「よし」が使われ、対象も「ま
み」「かんざし」「かたはら目」と具体的である。趣味の
方面や態度においても、表面的で技巧的な「風情」には「よ
し」が、それを生み出す本質的な「資性」には「ゆゑ」が
使われる。よって、「よし」は後天的な教養と、「ゆゑ」は
先天的な由緒・血統とより深くかわる趣だといえる。
そしてこの違いが、「ゆゑ」で表される趣と「よし」で表
される趣の、深さや品性における差の原因であると思われ
る。「ゆゑ」が「よし」より、深さや品性において一段程
度の高い趣を意味することは、事物の場合と同様である。
また、「よし」は、もの慣れた人間に見られる趣で、「ゆ
ゑ」には見られない「女性的ななよやかさ」や「好色性」
という性格を持ち、「明るさ」とも協調する。

第三章 身分による「ゆゑ」と「よし」の使い分け

第二章では「ゆゑ」と「よし」の使われ方を項目別に比
較していき、それによって「ゆゑ」「よし」の意味用法と
相違を考察してきた。その結果、「ゆゑ」「よし」は、自
然についての2例を除けば、すべての用例が人間に何らか
のかかわりがあり、人間の属性に集約できる概念であるこ

とがわかった。

すべての用例を人間を基準として見た場合、「ゆゑ」と
「よし」の間にどのような関係があるのだろうか。

第二章での考察によって「ゆゑ」「よし」は比較的高い
身分というものに結びつく傾向があり、特に人間関係にお
いては「ゆゑ」が「よし」より、より高い身分の人間に使
われるらしいということがわかっている。ここでは「ゆゑ」
「よし」を身分という面から計量的にとらえ、実際に、身
分によって「ゆゑ」「よし」が使い分けされているのかど
うかを明らかにしてみたい。

「ゆゑ」系の語と「よし」系の語で描写されている人間
で、一般名詞ではなく、名前（呼び名も含める）がわかり、
身分がわかるのは、「ゆゑ」系30人、「よし」系62人であ
り事物の描写はそれにかかわる人間の間接描写であるとい
う考え方から、事物に関係する人間まで含めると、「ゆゑ」
系66人、「よし」系90人になる。表18は「ゆゑ」「よし」
の使われる人物の一覧表である。身分を、上流・中流・下
流に分け、さらに上流と中流をそれぞれ四つの段階に分け
て、計九つの階級に分けて示してある。

人物がどの階級に属するかは、その人物の官位と家柄に
よるが、だいたい上流は三位以上、中流は六位以上の者と
した。細かい分け方は次の通りである。

①上流の上↓天皇・上皇・東宮に準じる親王・皇族出身
の中宮・中宮および藤壺女御腹の皇女

冷泉帝・後鳥羽上皇・陽成院・後深草院・朱雀院・藤壺

	ゆゑ (人)	ゆゑ (物)	よし (人)	よし (物)	計
①	6	6	4	1	17
②	8	6	2	4	20
③	3	7	14	5	29
④	4	1	14	2	21
⑤	0	10	9	7	26
⑥	7	4	11	4	26
⑦	2	2	5	1	10
⑧	0	0	4	0	4
⑨	0	0	5	0	5
計	30	36	68	24	158

	人物のみ		人物 + 物	
	ゆゑ系	よし系	ゆゑ系	よし系
①	6 (20)	4 (5.9)	12 (18)	5 (5.4)
②	8 (26.7)	2 (2.9)	14 (21)	6 (6.5)
③	3 (10)	14 (20.6)	10 (15)	19 (20.7)
④	4 (13)	14 (20.6)	5 (7.6)	16 (17.6)
⑤	0 (0)	9 (13.2)	10 (15)	16 (17.6)
⑥	7 (23.3)	11 (16.1)	11 (16.7)	15 (16.3)
⑦	2 (6.6)	5 (7.4)	4 (6)	6 (6.5)
⑧	0 (0)	4 (5.9)	0 (0)	4 (4.3)
⑨	0 (0)	5 (7.4)	0 (0)	5 (5.4)

⑥の 続き)	少納言の君	1			
	中將のおもと			1	
	中將の君		2		
	紫上の女房		2		
⑦中 流の 中下	侍従		1		
	尾張守(紫)	1			
	播磨守(紫)	1			
	空蟬			1	
	久資(増)	1			
	正秋(増)	1			
	斎宮の女房(更)			1	
	侍従の君(落)			1	
	典侍の君(落)			1	
	大夫のおもと(落)			1	
	⑧中 流下	伊予介		2	
		受領		1	
		童女		1	
⑨下 流	地方豪族		1		
	官人		1		
	下仕のまるや(落)		1		
	下仕の女		1		
流	遊女		1		
	計	30	36	68	24

- 一般名詞は除く。ただし「宮の女房」などの類である人物を指すものは入れる。
- 身分のわからない者は除く。
- 物の場合、持ち主、作り主を記す。持ち主と作り主が違ふのは持ち主を記す。
- カッコ内はパーセンテージを示す。
- 語形による差は考慮しない。

中宮・秋好中宮・明石中宮・匂宮・冷泉院の女一の宮・今上帝の女二の宮

②上流の中↓皇子または皇統で大臣になった者(あるいはそれに準じる者)・皇族で大臣の北の方・更衣腹の皇女大臣家出身の後

源氏・紫上・頭中將・薰・落葉の宮・中宮徳子・朧月夜玉鬘の娘の中の君・大斎院(選子内親王)・落窪の君

③上流の中の下↓親王・皇統以外の大員・大臣家出身の東宮妃・皇統以外の大員の方・更衣・皇女に準じる姫宮式部卿宮・宇治の八の宮・常陸の親王・紫上の父兵部卿宮・螢兵部卿宮・藤原道長・夕霧・六条御息所・朝顔齋院・玉鬘・落葉宮の母更衣

④上流の下↓大臣以外の公卿(三位以上)・公卿の北の方と子女・親王の子女

桜の宿の姫君・大君・吉野の姉宮・柏木・鬚黒大將・右大將・宰相中將・中將・麗景殿の女御の妹・源中將・桐壺更衣の母・北山の尼君・末摘花

⑤中流の上↓四位相当の官を持つ者・大臣クラスの者の正妻以外の妻妾・官中などの上臈女房

横川の僧都・北山の僧都・明石上・夕顔・浮舟・中宮女房・上の女房・小宰相の君・赤染衛門・源典侍・近江の君

⑥中流の中↓正五位相当の官を持つ者で、家柄のよい者その北の方・官家や権門家の女房(小上臈)

明石入道・小野の尼君・明石の尼君・弁の尼・小納言の

君・中將のおもと・中將の君(浮舟の母)・紫上の女房・侍徒(末摘花の乳母子)

⑦中流の中の下↓従五位相当の国守階級・公卿の家の女房(中臈)

尾張守・播磨守・空蟬・久資・正秋・齋宮の老女房・侍従の君・典侍の君・大夫のおもと

⑧中流の下↓六位クラスの受領階級・下臈女房・女童伊予介・受領・女童

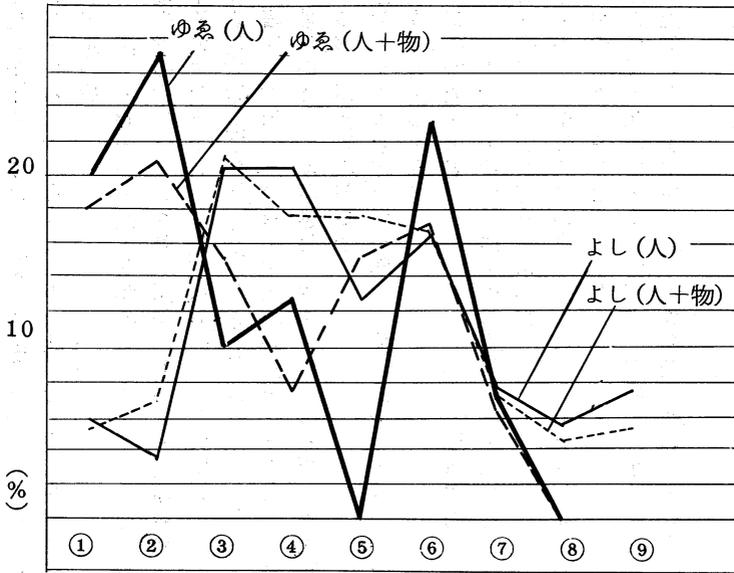
⑨下流↓六位未満の官を持つ者・地方豪族・下仕・その他

地方豪族・左の衛府の官人(將監・將曹)・まろや(下仕)下仕の女・遊女

このように人物の身分的種類をしてみると、表18でわかるように、①②などの高い身分の人物には「ゆゑ」系の語の方が多く使われ、「よし」系の語が使われることは少いようである。また逆に⑦⑧⑨などの比較的低い身分の人物に使われるのはほとんど「よし」であり、「ゆゑ」はあまり使われていない。

これをわかりやすくグラフに描いたのが、グラフ3である。それぞれの身分での「ゆゑ」「よし」の使用例数の、全体の使用例数における割合を示してある。太い線が「ゆゑ」の割合を表し、細い線が「よし」の割合を表す。また、実線は人間だけを対象とした場合の値であり、破線はそれらに「物」についての使用数も加えた場合の値である。このグラフは左へいくほど身分が高くなるのだが、①②の最高

(グラフ3) 身分別にみた「ゆゑ」「よし」



級の身分の部分は「ゆゑ」が高い割合を占め、さらに⑧⑨の最も低い身分には全く使われていない。それに対して「よし」は①②の最高の身分の人間にはあまり使われず、③④⑤の上流の下から中流の上あたりの人間によく使われるが、もっと低い身分の人間にも使われるということがある。結果として、一流・二流といった、はっきりした区別は見られないが、「ゆゑ」は最高級の人物に使われることが多く、下流の人間には全く使われず、対して「よし」は最高級の人物にはあまり使われず、中流の人間に使われることが多いが、下流の人間にも使われることから、やはり「ゆゑ」と「よし」の間には、身分による、使われ方の差異があるといっていだらう。「ゆゑ」は「よし」より、より高い身分の人間の「由緒」を意味し、その人間の「趣」あるいはその人間にかかわる事物の持つ「由緒」と「趣」を意味するのである。

「ゆゑ」「よし」に、このような使い分けが生じるのは、やはり両者の性格と、価値的な差異が原因だと思われる。

第二章での考察によって「ゆゑ」が本質的な趣で「よし」が表面的な趣であり、前者は先天的な血筋・由緒が、後者は後天的な教養がより深くかかわっているという結果が得られた。いわば「ゆゑ」は、高貴な品性が自然に表われた趣であり、「よし」は、洗練され、もの慣れた、教養の身につけている態度から感じられる趣といえよう。「ゆゑ」が最も身分の高い人間に用例が多く、「よし」が程度の差はあるがすべての階級の人間に使われているのは、こうい

う「ゆゑ」「よし」の性格の違いのためだと思われるのである。

結び

「ゆゑ」と「よし」は、共に「しみじみとした情趣」を意味する点で一致する。その趣とは、由緒と強く結びつき、「心にくし」や「なまめかし」と深い関連性を持つ概念で、平安朝の美的理想の一面を表すものである。

さらに、第二章での項目別考察によって、「ゆゑ」と「よし」の使われ方にはかなり差があることがわかった。「ゆゑ」は、事物では書物や儀式に、人物関係では「もてなし」や「ふるまい」といった抽象的な対象に使われることが多い、重々しく深い趣を意味する傾向があり、「よし」は人物についての具体的表現に用いられることが多い。

このような「ゆゑ」と「よし」の用法に見られる相違は、その性格の違いに由来すると思われる。「ゆゑ」は対象を全体的・客観的にとらえた時に見出される本質的・抽象的な趣を意味する。それに対して「よし」は、対象を部分的・具体的にとらえた場合に感じられる、より表面的で技巧的な趣である。

両者の関係は、本質的な「資性」と、それが形に表われた「風情」ということができよう。そのため、「ゆゑ」は先天的な由緒・家柄と、「よし」は後天的な教養と、より深く関係し、身分的にも、「ゆゑ」はより高貴な人物に、

「よし」は「ゆゑ」より低い身分の人物まで使われるのである。

このような「ゆゑ」「よし」の性格の違いによって、「ゆゑ」で表される趣と、「よし」で表される趣は、その深さや品性の程度に差が生じる。「ゆゑ」は「よし」より一段価値的に優れた趣だといえるのである。